

氏名	建元 喜寿		
学位の種類	博士（カウンセリング科学）		
学位記番号	博甲第 10880 号		
学位授与年月	令和 5 年 3 月 24 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審査学術院	人間総合科学学術院		
学位論文題目	高校生の海外研修プログラム参加による変容プロセスと その中長期的影響 —インドネシアにおける ESD の視点に立った 国際協働型プログラム開発に着目して—		
主査	筑波大学教授	博士（心理学）	岡田 昌毅
副査	筑波大学教授	博士（文学）	大塚 泰正
副査	筑波大学准教授	博士（心理学）	飯田 順子
副査	埼玉学園大学教授	博士（心理学）	大川 一郎
副査	千葉大学教授	博士（農学）	辻 耕治

## 論文の内容の要旨

建元喜寿氏の博士学位論文は、日本の高等学校における海外研修に焦点をあて、「世界の持続可能性」を育む人材育成という視点からプログラム開発を行い、プログラム参加による生徒の変容を中長期的視点から明らかにしたものである。そして、その研究成果を、高等学校における今後の海外研修プログラム開発に活用できる形でまとめ、高等学校における ESD の視点にたった海外研修プログラムの推進に資する提言を行っている。その要旨は以下のとおりである。

第 1 部「理論的検討」では、日本の高等学校における国際教育の現状と課題をまとめ、さらに、ESD の視点に立った海外研修プログラムの開発とその意義、また、東南アジアを研修先とするものの意味について述べている。そして、日本の高等学校における海外研修、海外における高校生を対象とした海外研修に関する先行研究の概観をおこない、①「共生型」グローバル人材の育成を目指した ESD の視点にたった国際協働型プログラムであること、②インドネシアにおける海外研修をプログラム開発の軸に据えること、③海外研修プログラム参加による中長期的な影響についてそのプロセスを含めて明らかにすることなど、本研究の軸を明確にした上で、研究目的へとつなげている。

第 2 部「ESD の視点にたった国際協働型海外研修プログラムの開発」では、建元氏が勤務先とす

る高校とその国際連携協定校であるインドネシアの高校を対象として、2国間の連携の中で、日本、インドネシア、双方に共通する「森林の持続性」を課題に設定し、インドネシアの農村部において、両国の高校生が協働で課題解決活動を行う短期研修プログラムの開発を行っている（研究1）。長期研修プログラムは、1年間の留学を軸に据えて、継続的・持続的な取り組みとなるように語学力や経済面に配慮したプログラムとなっている（研究2）。

第3部「国際協働型海外研修プログラムの影響に関する実証的検討」においては、海外研修参加による変容とその中長期的影響について、短期、長期の各プログラムにおいて、「両国の高校生のプログラム参加前後の変化についての量的検討（研究3）」「プログラム参加中の日本人高校生の変容プロセスについての質的検討（研究4）」「日本人高校生がインドネシア留学を決定していくプロセスの質的検討（研究5）」「インドネシア留学中の日本人高校生の変容プロセスの質的検討（研究6）」「国際協働型短期海外研修プログラム参加経験の中長期的影響の質的検討（研究7-1）」「国際協働型長期海外研修プログラム参加経験の中長期的影響の質的検討（研究8-1）」「国際協働型海外研修プログラム参加経験がキャリア選択に与える影響の検討（研究7-2, 研究8-2）」を行っている。

インドネシアにおける国際協働型短期海外研修プログラム参加経験による、日本人高校生の変容で特徴的であったことは、高校生が、プログラム参加前に抱えていた、「コミュニケーションへの壁」「協働への壁」「国・人種への壁」の3つの壁が、インドネシア人との相互作用の中で消し去られていくことであった。これらは、グローバル社会に対する心理的障壁を低減させ、持続可能な社会づくりへの素地を作るものである。長期海外研修プログラムに参加した生徒の変容の特徴は、①生きていく自信を獲得すること、②多様性を尊重する意識を獲得すること、③インドネシアが第二の母国化をすることであった。日本人高校生の高校時代のインドネシア海外研修経験は、短期であれ長期であれ、多文化共生や持続可能な社会の構築に資する変容をもたらし、その影響は中長期的にわたることを明らかにしている。

## 審査の結果の要旨

### (批評)

建元氏の学位論文は、①インドネシアと日本の高校の国際連携の中でESDの視点にたった短期、長期の海外研修プログラムを開発したこと、②それらの研修の効果について、短期的な変容だけでなく、中長期的な変容についても、そのプロセスも含めて質的な側面から分析をおこなっていること、③そして、これらの実証的な研究を積み重ねることにより、学術的に、独自性の高い、さまざまな有益な知見が得られていること等、高く評価されるものである。本研究の成果をもって、高校等の実践現場においてグローバルな人材を育成するための教育に大きく資することが期待される。

令和5年1月25日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。また、著者が学位を受けるために必要な知識・能力等（コンピテンス）を修得していることを確認した。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（カウンセリング科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。